るであろう。彼が真の逆説家たる所以である。実にワイルド自身がパラドックスに他ならなかったのだ。

ワイルドの言を通して，人が自己の中の逆説に気づくか否か――ウィットに富んだ人間と公式的な人間のどちらがよりよいか――おそらく解答は出まい。なぜなら「浅薄な者だけが自分を知っている」が，その逆もまた真なのだから。

ワイルドと私――ひとつの自分史――

西　村　孝　次
（日本ワイルド協会顧問）

およそ「時間」というものには，物理的な時間と人間的なそれとの二つがあるのではなかろうか？　つまり，ただの一年がその長さと厚みにおいて十年に匹敵する場合もあれば，またその反対の事例も少なくない。

わたしにとって，1924年（大正13年）という年は，その後のわたしにとって決定的な一年であった。その前年，わたしたちの家は破産し，三百五十年来住みなれた京都を去って山科へ移っていたが，この年の四月から中学五年生のわたしは本多平八郎先生（のちの大阪外国語大学名誉教授）に英語を教わることとなった。それはわたしを英語という異国の言葉に開眼させる幸福をもたらしてくれた。また，その同じ月，志賀直哉を訪ねて西下した東大生・小林秀雄に初めて会った。小林は父かたのいとこで，かれによってわたしはおのずから文学への道を歩みはじめるようになった。そして，その年の秋，わたしはひとりの女とめぐりあった。わたしは初恋をした。

女はマドンナであった。そしてまた Bestia trionfans（勝ち誇れるけだもの）でもあった。わたしは歓喜とともに絶望に打ちのめされねばならなかった。礼賛と性欲のはざまで，わたしはのたうち回った。べつに異常でも変態でもなかったはずだが，ただ少しばかり強すぎたのかもしれない。わたしは純潔を求めながらも汚辱にまみれた。そんなときなのだ，「官能のほかに魂を癒せるものはない，ちょうど魂のほかに官能を癒せるものがないように。それこそが人生の大いなる秘密のひとつなのだ」というワイルドの箴言（『ドリアン・グレエの絵姿』第一章）を読んだのは。

わたしの恋は，ほとんど当然のように，みのらなかった。わたしは東北大学に入り，仙台の朝と昼は目をつぶしそうな濫読に，夜は身をすりへらすまでの酒と女に明け暮れた。京都―仙台間の往復の途次，いつもわたしは鎌倉に小林を訪ね，かれの恐るべき誘惑によ

って次第にワイルドへとのめりこんでいった。

結婚，それから戦争と敗戦。まさに瓦礫の山と化した東京のまっただなかで，わたしの新生は始まる。ワイルド，スウィフト，D・H・ロレンスと，わたしは思想と美意識の遍歴を重ね，1980年このかた，わたしはワイルドに集中して自己の存在を確認しようとしてきた。ワイルドの生き方と死にざま，かれのあの業績などは，もしかしたら過誤と失敗にすぎないかもしれず，というよりもわたし自身のワイルド理解が，すっかり的外れだったのではなかろうか？　要するに，わたしはかれに迷わされていた。だが，親鸞は語っている――「たとひ法然上人にすかされまひらせて念佛して地獄に落ちたりとも，さらに後悔すべからずさぶらふ。」わたしはワイルドに欺かれて地獄に堕ちようと，いまはいささかの後悔もないのである。

西のワイルド学会ちょっといい話

堀　江　珠　喜
（園田学園女子大学助教授）

昨年11月19日，園田学園女子大学での学会の成功については，未熟な主催者（ホステス）として，皆様方に感謝の意を表したい。また充分な準備期間・好天・地のりの良さのお蔭もあるが，やはりプログラム，特に西村先生の存在の大きさには改めて敬服する。

先生が隣席にいた私のゼミの学生に，「誰の話に期待しますか」と尋ねられたところ，本人とも知らずに「もちろん西村先生です」という答え。「ではどんな先生だと思いますか」「きっと偏屈な人でしょう。すぐ怒ったりして。偉い方のお話は難しいから，また退屈してしまうんじゃないかと思います」先生が壇上に立たれたときの彼女の驚きはいかばかりであったか。ウッソー！　閉会後，サインを求めて彼女が差し出した本に先生は，「私の横に座った人」と書き，ウィンクをなさったそうだ。

ワ　イ　ル　ド　書　誌（1985年3月～1989年）

森泉弘次注釈「The Birthday of the Infanta」『British Short Stories』三修社　1985年3月1日

石井　敦子「オスカー・ワイルド（断片）――ある唯美主義者の回想――」『麻布大学教養部研究紀要』（麻布大学）　第19号　1986年3月

奥村　三郎「オスカー・ワイルドの『理想の夫』について」『人文研究』第38巻第2分冊（大阪市立大学文学部）　1986年12月